

21. Clinicopathological study of a dimorphic variant of breast carcinoma

¹⁾ 獨協医科大学病院 第一外科,
²⁾ 病理診断学, ³⁾ 第二外科
 室井 望¹⁾, 黒田 一²⁾, 窪田敬一³⁾,
 加藤広行¹⁾, 今井康雄²⁾

【目的】本研究は、dimorphic 型乳癌の臨床病理学および免疫組織化学的特徴を明らかにすることである。

【方法】2000年～2016年の期間、獨協医科大学病院にて乳癌と診断され手術を施行した患者を対象とした。病理学的に dimorphic 型乳癌と診断された50例と、コントロール群として浸潤癌の症例から特殊型を除いた784例を用いた。検討項目は estrogen receptor (ER), progesterone receptor (PgR), human epidermal growth factor receptor (HER2), E-cadherin, cytokeratin 5/6 (CK5/6), cytokeratin14 (CK14), androgen receptor (AR), gross cystic disease fluid protein 15 (GCDFP-15) をプロトコルに従い免疫組織化学的染色を行った。また、dimorphic 型乳癌症例の年齢、腫瘍径、組織学的異型度、リンパ節転移、stage、無病生存期間、全生存率の比較検討と乳癌を4つのタイプに分類し、生物学的特徴の比較検討を行った。

【結果】dimorphic invasive carcinoma (IC) は組織異型度が低く HR+/HER- タイプの乳癌が多く存在した。dimorphic IC 群と non-dimorphic IC 群の年齢、平均腫瘍径、リンパ節転移数、stage、無病生存期間、全生存率には有意差は認められなかった。免疫組織化学染色の結果では、dimorphic 細胞は多くの場合において p63 と CK5/6, CK14 が陰性であった。対照的に、HR と AR は陽性であり、E-cadherin と GCDFP-15 も陽性となった。しかし、dimorphic 細胞と隣接する悪性上皮 (adjacent malignant columnar epithelial : AMCE) 細胞間には有意差は認められなかった。

【考察】ほとんどの症例が今まで典型的な構造の観察で IC または ductal carcinoma in situ (DCIS) と診断されていた。さらに、dimorphic 細胞と AMCE 細胞との間の核の形態に差異はなく、形態学上 dimorphic 型乳癌は乳癌の亜型として判断され得ると考える。また、dimorphic IC は non-dimorphic IC と比較して有意に HR+/HER2- が多く、HR-/HER2 が少なかった。これは dimorphic IC が低悪性度の腫瘍である可能性を示唆した。dimorphic 細胞と AMCE 細胞との表現パターンの比較では違いがないことから、dimorphic 細胞は同じ起源からの浸潤性乳癌の亜型であると推測された。

【結論】本研究の結果から、典型的な形態学的構造と免疫組織学的マーカーは dimorphic 型乳癌の診断の補助となり得ると思われた。

22. 転移性尿路上皮癌における予後因子としてのサルコペニアの有用性の検討

獨協医科大学 泌尿器科学

山口佳志, 植松稔貴, 戸倉祐未, 成松隆弘,
 幸英夫, 神原常仁, 別納弘法, 阿部英行,
 深堀能立, 安土正裕, 釜井隆男

【目的】全身化学療法を受けた転移性尿路上皮癌患者において、サルコペニアが予後予測因子となり得るかについて検討した。

【方法】2007年から2015年までに当院で全身化学療法を受けた転移性尿路上皮癌患者87名を対象に、CT上第3腰椎レベルでの筋肉群の面積を用いて3つのindex (SMI, PSMI および TPA) を算出した。サルコペニアの定義は SMI が男女別の基準値以下、肥満の定義は BMI 25 kg/m² 以上とした。PSMI および TPA は男女別の中央値を cut-off 値とし、SMI, PSMI および TPA それぞれにおいて、高い群と低い群の全生存率 (OS) を比較検討した。また多変量解析を行い、予後予測因子について検討した。

【結果】OSの中央値は16か月であった。PSMI および TPA は、SMI と強い相関を認めた。3つの index の群別においていずれも単独では、OS に有意差を認めなかったが、SMI を BMI で層別化したところ有意差を認め、サルコペニア肥満群では非サルコペニア群に比し、有意に OS が低下していた。多変量解析では、CRP 高値およびサルコペニア肥満が、悪い予後を予測する独立した因子であった。

【考察】カヘキシアの診断には SMI が用いられるが、全身化学療法を受ける患者は、少なくともカヘキシアの状態ではなく、SMI のみでなく BMI も考慮した評価が望ましいと考えられた。

【結論】全身化学療法を受けた転移性尿路上皮癌患者において、サルコペニア肥満は独立した予後不良因子であると考えられた。